

センター便り

公益財団法人浅香山病院 臨床研究研修センター
〒590-0018 大阪府堺市堺区今池町3丁3番16号
TEL: 072-229-4882 (代)
ホームページアドレス: <http://www.asakayama.or.jp>



臨床研究研修センター長より

IC (informed consent) を「行う」、 「受ける」?

臨床研究研修センター長 しのさき かずひろ 篠崎 和弘

当センターの最近の活動を紹介します。

臨床倫理コンサルテーション (CEC) チーム

IC (informed consent) を「行う」、「受ける」、どちらの表現をお使いですか。ICとは「情報を理解した上での同意」ですから、「受ける」というのが正しい使い方です。私自身がつい間違えてしまうのは、臨床姿勢の基本的な部分が現在の標準にアップグレードされていないためかもしれません。

国本副センター長をリーダーとして、臨床倫理コンサルテーション (CEC) チームを2022年10月に発足し、1年で25件の支援を行いました。CECチームは答えを出すのではなく、考える論点を整理して患者・家族と医療・ケアチームの合意形成を支援します。たとえば患者が合理的ではない手術拒否をした場合、自律尊重原則が大原則ですが、他人には見えにくい事情によって本心ではない可能性もあります。さらに認知症や精神疾患のために同意能力に問題があれば話は変わってきます。ではどうやって同意能力を評価するかというと、①説明を理解し、②認識し、③論理的に考え、④選択を表明する4段階の力を評価します。よくある誤解の一つが「同意能力は有り、無しどちらかだ」です。実は中間段階があります。また「自分だったら?」という考え方を私は使ってきましたが、この方法は自分とは異なる選択をする人がいるという多様性を見落とす危険があります。CECチーム活動は経験と技術が必要で奥が深いようです。

CECチームは最善の医療の提供を目指した環境整備も始めています。「臨床倫理指針」、「透析継続の見合わせに関する意思決定プロセスの指針」、「宗教的輸血拒否患者の対応方針」などを準備中です。

研究倫理審査

年末のニュースに「大リーグ・ドジャースへの入団を決めた大谷翔平 (29) の大型契約に、大谷側から契約を破棄できる権利「オプトアウト」の条項が盛り込まれている」とありました。

臨床研究でも「オプトアウト」はよく使われます。たとえば「昨年、〇〇病で入院治療を受けた全員の方

を対象にカルテ上の情報をもとに〇〇の研究を行います。研究に参加されたくない方はご連絡ください」といった内容の文書を病院ホームページに掲載しますがこれを「オプトアウト」といいます。これによって、ICに替えて患者さんに研究参加を拒否する機会を保障しています。

令和5年度 (まだ途中ですが) の倫理審査は12件。看護部から7件、精神科医局から4件、デイケアから1件でした。看護部の研究活動の高いことに敬服します。大阪大学、大阪公立大学の看護学部の方の先生方のご支援のおかげでもあります。御礼申し上げます。

全国規模の研究は3件が進行中です。研究代表機関は高知大学 (認知症の行動・心理症状の生物学的解明と予防研究)、慶應義塾大学 (うつ病磁気刺激療法 TMSのデータベース・レジストリ研究)、国立精神・神経医療研究センター (TMS維持療法の先進医療研究) です。研究の成果が臨床現場や保険制度に反映される日が来るのが楽しみです。

浅香山病院医学雑誌

他の病院雑誌に比較し、様々な職種からの投稿があることが特徴です。理事長賞 (論文)、編集委員会賞 (エッセイ) を令和5年秋に表彰しました。看護部、アンダント就労ステーションのスタッフが受賞しました。受賞者のコメントを次ページに掲載しました。研究活動の最中、論文をまとめる最中には、風呂の中で、布団の中で、考え続けたことでしょうか。仕事をルーチン化せず、挑戦する情熱はどこから来ているのでしょうか。仕事を通して創造的活動を目指している投稿者の姿勢に敬意を表します。浅香山病院がこの情熱をばぐみ続けていると考えると、100年の歴史と、幾多の先輩たちを思い出し、当院の職員の一員であることに、少し誇らしい気分になります。

学術論文投稿経費助成

学会誌の投稿に際して多額の掲載料を求められることがあります。そこでこの助成制度ができました。令和3年度は1件、4年度は2件の利用がありました。この助成を活用してください。

創刊号 理事長賞（優秀論文賞）
「障害者雇用から考える共生社会」
浅香山医学vol.1：75-82, 2022

この論文はここ数年「『弱く働く』ための就労支援」というタイトルで学会発表してきたものをまとめたものでした。「弱く」という形容詞と「働く」という動詞のミスマッチな組み合わせにしたのは、「強く、速く」という効率や能力がとかく重視される社会への小さな抗いとしたかったからです。ヒントになったのはべてるの家の「弱さの情報公開」や2023年亡くなられた立岩真也さんの著作「弱くある自由へ」などです。どちらもミスマッチな言い回しですが、そのどこか強い響きに惹かれました。

本論文のタイトルは脱稿直前につけたように記憶していますが、結果的に「共生社会」という大それたテーマにふれることになってしまいました。

振り返れば私が「共生」について考え始めたきっかけは8つ離れた兄の高校受験でした。兄には重度の知的障害がありますが、養護学校（現在の特別支援学校）には行かず、小中と地域の学校に通っていました。当時は特別支援学級もなく、皆と同じ教室で共に時間を過ごしていました。そんな兄が高校受験、という事件（？）は当時小学1年だった私にも不思議に思えました。合格発表の日、張り出された紙に兄の番号がない、という場面を父がビデオに収め

アンダンテ就労ステーション
たにおく だい ち
係長 谷奥 大地

ていたことを今も鮮明に覚えています。

翌春、その高校の裏に父は作業所を作り、兄や同じ境遇の障害児が通い始めました。放課後になると、中学時代の友人が多数作業所に顔を見せてくれました。今でも中学の同窓会では兄は友人たちに囲まれるようです。

「できる、できない」で人を選別することで効率はあがるかもしれませんが、多様性は損なわれます。異質なものを吐き出してシャープになるのか、それとも受け入れてソフトになるのか、それが問われる場合は案外日常的にあるものです。結局、この論文を通じて言いたかったことは社会に対して何か大それたこと、というよりは日常的に生じる「排除の声」との向き合い方について、自戒も込めて考えたのかかもしれません。

この度は名誉ある賞をいただき、誠にありがとうございました。これを励みに今後も精進したいと思います。



創刊号 委員会賞（優秀エッセイ賞）
「私の傾聴論 ～緩和ケア病棟から～」
浅香山医学vol.1：129-130 2022

東4病棟
やまぐち あん な
主任 山口 杏奈

今回、私が書いた傾聴論がこのような賞を頂くことになり、ありがたい反面、申し訳ない気持ちがあります。他のエッセイと違い、傾聴について明確に答えを持っている訳ではなく、看護を見つめ直すきっかけを与えてくれたのも、この事例の患者と受け持ち看護師、協働してくれた病棟スタッフや多職種のおかげであり、私はその経験を代理でまとめたに過ぎないからです。

この受け持ち看護師は、関わる全ての患者に対し、身体・精神的に苦しんでいる人をどの様に支えたら良いのかと日々悩みながら看護を行っていました。常に心優しく患者と向き合い、その存在自体が患者の助けになっていると思える看護師でした。自傷行為を続ける患者に心を痛め、どの様に関われば良いのかと悩み相談をして来ましたが、私は具体的なアドバイスが出来ませんでした。教育的立場にある自分が何も指導出来ないことが情けなく、しかし、この心優しい看護師が和らげることの出来ない患者の苦痛はどの様なことをしても解決することは出来ないだろうと諦めて

いた自分がいました。どのような病期にあっても出来るだけ安楽なケアを提供出来る看護師でありたいと思っていた自分が、いつの間にか、どこか自分の都合の良いように看護の限界を決め、患者と向き合い看護を行えていなかったと痛感しました。そこからは、何があっても患者のありのままを受けとめ寄り添うと心に決め、その結果が、患者の1日生きられたことに対する感謝と本音の吐露につながりました。

病を患い、少しずつ身体的な苦痛が増えていく恐怖、他者の援助を受けなければ生活が送れない惨めさ、1日を生きることがつらいといった経験を私はしたことがありません。私は緩和ケアを離れ、現在急性期で勤務をしていますが、高齢で慢性疾患を抱えた患者が多く、亡くなる方も少なくありません。上記の様な苦痛を感じ、それでも必死に生をつないでいる患者に対し真摯に向き合い、その苦悩を出来るだけ受けとめ、こころからのケアを提供出来る様、更に精進していきたいと思っています。

第2号 理事長賞（優秀論文賞）

「緩和ケア病棟における多職種とのチーム医療
～予後予測スケールを導入して～」

浅香山医学 vol.2 : 63-67, 2023

西4病棟
おおいし まさこ
副主任 大石 真紀子

この度は荣誉ある理事長賞を頂戴し、大変光栄に存じます。ありがとうございました。

緩和ケア病棟では日々一人で最期を迎える患者が増えてきたことや臨終期の判断が個々で異なっていることに疑問を持ちました。そこで私たちは緩和ケアの質向上を目指し2020年にがん患者の終末期予後予測スケールを使用する看護研究を始めました。研究の結果、臨終期の判断を可視化したことで多職種と病状を適切に共有し、同じ方向性で理解が出来るようになりました。そのことから、多職種カンファレンスが適切に行われ、外泊・退院支援や症状緩和、家族ケアなど必要な治療やケアが適時に提供でき患者・家族のQOL向上に繋がったと考えます。現在は病棟内で予後予測スケールの使用が日常化しています。病棟スタッフからは「全身観察ポイントやケアの理解ができた」多職種からは「受け持ち看護師がいなくてもケアの方向性が分かり介入しやすかった」などの声がありました。独自のスケール導入のため、今後も繰り返し改善が必要と考えます。予後予測スケールが緩和ケア病棟だけでなく、院内に広がり共通認識ができると転棟があってもシームレスなケア提供に繋がると期待したいです。

2020年院内看護研究発表、2022年日本看護協会学術集会で発表、2023年浅香山病院医学雑誌に掲載して頂きました。先生方のご指導を受け構成を何度も修正し大変でしたが、進めていく過程で新たな気づきや視点の転換など学ぶことができました。

受賞表彰当日はサプライズでした。部屋へ入るとたくさんの方々に「おめでとう」と祝っていただきました。驚きとともに受賞した重みを感じ背筋がピンと伸びました。

また「自分と同じ病気を持つ方々のためになるなら協力させてほしい」と快く協力してくださった患者・家族の方々、ご指導・ご鞭撻にご尽力頂いた諸先生方、副センター長、多職種の方々、病棟師長、病棟スタッフの方々へこの場をお借りして感謝申し上げます。今後も患者ファースト、患者の意思を尊重したケアを提供できるよう邁進したいと思います。

第2号 委員会賞（優秀エッセイ賞）

「私のリハビリ論 ～取り戻すべきもの～」

浅香山医学 vol.2 : 111-113, 2023

アンダンテ就労ステーション
もり かつひこ
所長 森 克彦

この度はこのような形で評価をしていただき、大変恐縮しております。

ずいぶん前のことになりましたが、地域生活支援センターで勤務していた頃、通所利用をされている一人のクライアントから声をかけられました。ある概念に関する事で文章を書きたいのだが、うまくまとめられない、あなたならどう書くか、とのことでした。その方は社会運動などにも長く関わって来られたベテラン(?)で、そんな話を持ちかけてもらったことが嬉しくて、自分なりに張り切ってまとめてみました。参考文献なども引きながら、我ながら少々まとまった文章が書けたとお見せしたのですが、その方は一読するなり、「こんなものはだめだ。ボツ。」とにべもない反応でした。がっかりすると共に、どこがまずかったのだろう、と混乱もしたのですが、彼は「あなたは現場の実践家でしょう。それなら現場の、実践の言葉で話さない。」と続けました。なるほど、確かに自分の立脚点は自分の実践に他ならないし、現場のことを伝えることこそが実践家の使命であり、誇りでもあったはずだ、と気

づかされ、納得すると共に、恥じ入りました。現場の言葉。実践の言葉。それは他の専門職の方にも非専門職の方にも届く、平易でかつ練られたものでなくてはなりません。今でも自分が大切にしたいと願っているところです。そして言うまでもなく、言葉はその人の中にあるものを形にするのであって、たとえばコラムなどは日常の思索の結実に他ならないと思うのです。

出来上がってきた2冊の学術誌を読んで一番感じたことは、皆さん、いい文章を書くなあ、ということでした。借り物ではなく、単なる作文でもなく、それぞれの実践の中で感じたこと、考えてきたことがきちんと言葉になっている。そこには例外なく、実践家としての誇りがあり、正直なところ、自分の文章が並べられていることを少し恥ずかしくさえ感じた次第です。当法人にはこんなに素敵な実践家たちがいる。自分がその片隅に加えていただいていることを素直に光栄だと思いました。ありがとうございました。

浅香山病院 学会・研究会発表等

(2023年10月~2023年12月実績)

■学会・研究会

種類	発表(演題)名	発表者名	所属	会名	発表年月日
1	シンポジウム 認知症と発達障害	繁信 和恵	精	第38回日本老年精神医学会大会	2023/10/14
2	レジリエンスが機能する条件:患者に影響を及ぼす前に発見されたエラーの分析	寛 弘恵、石原 啓之、岡 耕平	安	第11回医療安全実践教育研究会	2023/10/15
3	精神科救急病棟での退院支援における多職種連携—看護師からみた多職種連携と多職種連携への意識:質的研究—	辻 翔琉、上田 一輝、住 貴浩	看	日本精神科看護協会大阪府支部「令和5年度看護研究発表会」	2023/10/27
4	「遊ぶこと」「遊べないこと」の機序に関する探索的研究—成人のスクイグルにおける相互交流の質に着目して—	山岸 礼門	心	第69回日本精神分析学会	2023/11/4
5	「弱く働く」ための就労支援Ⅳ～合理的配慮編②～	谷奥 大地	就	第22回日本精神保健福祉士学会	2023/11/4
6	透析室における腎不全看護とその方向性—CKDLNへの期待—	中原 宣子	透	第26回日本腎不全看護学会	2023/11/18
7	精神障害をもち外科的手術をうける患者に関する術前カンファレンスについての看護師の体験—インタビューによる質的分析—	川崎 恵理子、甲斐 あゆみ	看	第30回日本精神科看護専門学術集会	2023/11/22,23
8	長期入院患者の退院支援について考えよう!	大山 英文、東野 勝幸、寺内 康人、齋藤 雄一	看	第30回日本精神科看護専門学術集会	2023/11/22,23
9	ノーマルケア導入における実践報告	野沢 真吾、久保田 誠二、川越 香織	看	第30回日本精神科看護専門学術集会	2023/11/22,23
10	40歳未満で発症した行動障害型前頭側頭型認知症自験例4例の臨床的特徴の検討	繁信 和恵	精	第42回日本認知症学会	2023/11/25
11	MRSAを検出した心臓嚢胞に対し外科的切除を行った一例	宮島 淳	内	第136回日本循環器学会近畿地方会	2023/12/16
12	アトピー性皮膚炎を基礎に発症した若年患者の感染性心内膜炎の一例	織田 義弘	内	第136回日本循環器学会近畿地方会	2023/12/16
13	家族みんなで認知症ケアのヒントを知ろう	三好 豊子	看	社会福祉法人堺市社会福祉協議会「認知症家族のための講座」	2023/10/3
14	当院における重症喘息患者について	櫻井 佑輔、小島 和也(座長)	内	新時代の重症喘息治療を考える	2023/10/11
15	COPDと呼吸管理	小島 和也	内	第33回OMUChestForum	2023/10/12
16	認知症について	山本 朝美	看	医療法人弘生会老寿やすらぎ病院「認知症ケア検討会」	2023/10/25
17	喘息の基本治療について～PAGM2023を踏まえて～	小島 和也	内	Bronchial Asthma Live Seminar in 堺	2023/10/26
18	認知症4大疾患、せん妄における症状や対応方法等	三好 豊子	看	大阪府社会福祉事業団「令和5年度 堺市病院勤務の医療従事者向け認知症対応力向上研修・看護職員認知症対応力向上研修」	2023/10/27
19	看護研究発表会(研修会No.2302-第2席)	大谷 美希(座長)	看	日本精神科看護協会大阪府支部「令和5年度看護研究発表会」	2023/10/27
20	精神科における慢性便秘症の現状と課題	篠崎 和弘(座長)	精	エビデンスとガイドラインに基づいた最新の精神科便秘治療を考える会(EAファーマ)	2023/11/6
21	退院支援につながる、明日から使える患者中心のケアモデル	島津 聖子	看	日本精神科看護協会大阪府支部「退院調整研修会」	2023/11/11
22	認知症家族介護者の過度な感情表出(高EE)に対する感情支援介入について考える	繁信 和恵(座長)	精	第42回日本認知症学会	2023/11/24
23	長期的な睡眠測定センサーの病前から終末期までの継続的活用	繁信 和恵(座長)	精	第42回日本認知症学会	2023/11/26
24	双極性障害の診断と治療:ガイドラインと臨床から	篠崎 和弘(座長)	精	第2回Psychiatry Seminar(大家製薬)	2023/11/27
25	アドバンスOSCE講師	和田 直也	リ	大阪保健医療大学	2023/12/2
26	医療安全・認知症ケアの充実等	三好 豊子	看	大阪府社会福祉事業団「令和5年度 堺市看護職員認知症対応力向上研修」	2023/12/6
27	Tezepelumabによる喀痰分画の影響	山田 一宏(座長)	内	シン・重症喘息治療～外的因子に立ち向かう～	2023/12/8
28	COPDの治療について考える～ICSの適当とは?～	小島 和也	内	和泉呼吸器疾患セミナー	2023/12/9
29	自施設の課題整理と改善に向けた方策	山本 朝美(ファシリテーター)	看	大阪府看護協会「大阪市看護職員認知症対応力向上研修」	2023/10/19
30	精神科で虐待に向かい合う	齋藤 雄一(パネリスト)	看	第30回日本精神科看護専門学術集会	2023/11/22,23
31	精神医学II	正木 慶大	精	森ノ宮医療大学 作業療法学科	15回
32	精神医学I	正木 慶大	精	大阪医専 作業療法学科	10回
33	精神医学	正木 慶大	精	大阪医専 言語聴覚療法学科	12回
34	神経・生理心理学	正木 慶大	精	神戸女子大学 心理学部	10回
35	精神医学	嶋 健作	精	四條畷学園大学 リハビリテーション学部	4回
36	精神医学	嶋 健作	精	大阪医専 救急救命学科	3回

■論文・著書

論文・著書名	著者(全員)	所属	誌名、巻:ページ、年
症候学から見極める認知症 第3章症候学 各論 8.常同・強迫行動	繁信 和恵、池田 学 編	精	症候学から見極める認知症、137-141、2023
Predicting postoperative delirium after cardiovascular surgeries from preoperative portable electroencephalography oscillations.	Hata M,Miyazaki Y,Nagata C, Masuda H,Wada T,Takahashi S, Ishii R,Miyagawa S,Ikeda M,Ueno T	精	Frontiers in Psychiatry, 14:1287607,2023
メタンフェタミン使用障害における非侵襲的脳刺激療法と薬物療法のNetwork Meta-analysis	高橋 曾、曾 兼濤、李 正達	精	精神神経学雑誌, 125(11):923-931,2023
透析室看護師のプライマリーとしての活動の実際と課題	中原 宣子	透	臨牀透析, 39(11):63-68,2023
透析室でのハラスメント管理	中原 宣子	透	臨牀透析, 39(13):71-74,2023
特集:透析室におけるプライマリーとしての看護-患者主体のケアのために「コラム」プライマリーとしての理学療法士の役割	三ツ石 一智	リ	臨牀透析, 39(11):89-90,2023
風景構成法の現在	山岸 礼門 他、皆藤 章、浅田 剛正 編	心	誠信書房,2023
症候学から見極める認知症	中山 愛梨 他、池田 学 編	心	新興医学出版,2023

■主催講演会

講演会・勉強会名	演題名	講師名	開催年月日
認知症疾患医療センター講演会	突然やってくる災害に備えて! ~災害から認知症の方を守るための基礎知識~	平井 恵子、山本 朝美	2023/10/6
CKD(慢性腎臓病)教室	運動塾—バランステストに挑戦—	三ツ石 一智	2023/10/7
第22回浅香山健康セミナー	ひざの痛み、ありませんか?	住友 暁	2023/11/18
堺市認知症初期集中支援チーム講演会	なぜ、高齢者のセルフ・ネグレクトが注目されるのか	鄭 熙聖(関東学院大学社会学部現代社会学科准教授)	2023/12/4
CKD(慢性腎臓病)教室	血液検査データの意味	櫻井 円	2023/12/9

■研修医による学会・研修会発表

発表(演題)名	発表者名	会名	発表年月日
急性胆管炎の入院時に判明したこつば型心筋症の一例	阿瀬 斐	第242回日本内科学会近畿地方会	2023/12/9
洞不全症候群を合併したリチウム中毒の一例	谷口 真美	第136回日本循環器学会近畿地方会	2023/12/16
意識障害と呼吸不全を認めた否定形肺炎の一例	原田 晃	第67回プライマリケア合同カンファレンス	2023/12/21

所属: 精(精神科)、透(人工透析センター)、内(内科)、安(医療安全管理室)、看(看護部)、心(臨床心理室)、就(アンドンテ就労ステーション)、リ(リハビリテーション部)